

幻想日記短編 薬睡



mikatuki98

薬と悟りの境地

薬は黄色い蓋の瓶の中にあった。

錠剤は黄色いが少しオレンジかかっている気もした。

だか、それは湿気っていたせいだったんだ。

たとえ使用期限が来ていなくても、封を開けた以上は半年以内に使用しなければならない。

そうか……そんなことが説明書に書いてあったなんて、生まれて初めて知った。

生まれて初めて？

一体何年経ってんだ？

遅すぎやしないか。

一瞬、負の感情に覆われるが、まだまだ生きていれば薬を飲む機会もあるだろう。

となると、間に合ったと言ったほうがいだろう。

効くか効かぬか、さあどっち？

一か八かの賭けにでる…… 大袈裟だな。

薬は真面目に三度ほど続けて飲んだ。

三度続けてと言ったってちゃんにご飯を食べた後にだよ。

4時間は間を開けてるし。

自分でボケとツッコミを言ってみる。

これは妙薬ですよ。

そう言われて小麦粉を渡され飲んだ病人が元気になった逸話。

多分、本当に元気になったのだろう。

なにせ病気というから、気持ちが大事。

湿気ったような薬を飲んで熱は下がり悪い痰も自力で出して回復に向かっている。

そうだ。

他力即自力。

どちらも必要なのだ。

熱を下げる為に一枚多く着込みマフラーを巻いた。

夢の中では更に二枚多く着ていた私は、どっぷりと汗をかいていた。

目覚めた私の髪の毛先はプールから上がったように濡れ、マフラーがしっとりとなっていた。

夢も現実も同じ世界なんだね。

ただ其処には時間差があるだけ。

まるで悟ったような心境。

オレンジでビタミンCを補ってるつもりで短編の続きを書く。

ところが実際にはキーを打っているから悲劇は起こった。

順調に紡がれた600字の文字が、一瞬のうちに消えた。

熱は一晩以上かかってやっと下がったというのに。

なんてことだ。

気がめいって病気になりそうだ。

気になることがあっても、完治するまで我慢の子でなければならなかったのか。

これもまた悟りの境地への課題か。

<急がば回れ>

何となくお廉い感じのことわざで締めくくるとしよう。

私は多分、きっと恐らくね、まだ微熱があるんだね。

だって幻想日記が書けてるんだもん。

了

降ればどしゃぶり Cats & Dogs 眠れば爆睡 Boo&Goo

夜、食後に飲む薬は咳止め・痰を柔らかくする薬・気管支を広げる薬・アレルギー予防薬そして胃薬。今までの人生において一番薬の種類と量を飲んでいる今、外は雨模様で雨音が睡眠を妨げるどころか、薬のせいでイカンジの子守唄になるだろう。

それにしても、薬というものには必ず副作用というのがあるようで、病状は回復しているようで何だか身体は何分の一かが眠っているように感じる。死とは睡眠の睡眠だと何かの本で読んだが、確かに老衰していく人間は睡眠時間が増えていく。ここ最近、薬のせいで赤子のように眠り続ける自分がふと怖くなる。

体調不良から時間の流れが全体的にずれて来ているせいか、寢室の掃除が終わったのが既に深夜。早く寝ないと夜が明けちゃうわと慌てて寝るが、どうせ起きれないだろうなと思いながらも目覚ましを設定すると、必ず5～10分前に目が覚める。神経が立っているからかと思ったりもするが、本当は私担当の目覚まし係が居て鼻を一掴みして起こしているに違いない。日によって目覚まし係は姿を変えてやって来る。今朝は多分、肉球のある奴。そんな想像をする方が人生はきっと嬉しい。

今朝はそんな目覚まし係が上手く起こしてくれたお陰で、溜っていた洗濯を精力的にした。実際は自動洗濯機が働いてくれるので、よく動いてくれて助かるよ！ありがとね～と感謝の言葉を述べるだけだが、干し終わった頃には早くも私の肉体エネルギーが切れてしまった。それもその筈、朝ご飯を食べないで延々動いていたからで、かと言って何も猪突猛進でやっていた訳でもない。

一連の流れが稼働し始めると、流れに乗るのが自然体と言うもの。干し終わる頃に次のグループの洗濯が終わり、洗濯物たちが干してくれ～と騒ぎ出す。次を入れるから待ってよ、と言いながら、結局2番目グループを干し終わる頃に3番目グループが騒ぎ出すとまあ、そんな具合でご飯は後回しになったという訳で。それよりも薬を飲まなきゃと急いでご飯を食べるが、食べ終わる頃にはどうにもこうにも睡魔に襲われてしまった。

食べながら聴いていた懐かしいオザケン（小澤健二）のアルバムのせいか、1時間だけと思って昼寝をした間に、ちゃっかりオザケンと夢で出逢った。噂話で最近音楽業界に復帰したらしいと聞いていたせいか、夢の中での彼は少しパーマをかけウェーブの掛かったヘアスタイルで、何となく約10年前よりは大人びて見え、より一層色香が漂っていた。いやいや、色香と表現をするほど彼に特別な感情は無いが、感情の無い私がオヤ？と思うオーラが出ていたのは事実。

実を言うと、オザケンと一緒に姿を見せた男の影の正体が何やら気になる。何故かセピア色に染まっていたその男は、オザケンよりも少し体格がいい。マネージャーなのかどうか？気安くオザケンに近付くんじゃねえよ……とでも威圧してみせていたのか？

結局、謎の男のせいで、オザケンとは言葉を交わせなかった。

もし会話をしていたら、彼はこう言うだろう。

「ボクの昔の音楽を聴いて、キミはボクのことを能天気な人って言ったね」

「え？ 聞いてたの？」

「もちろんさ。あのね、イイことを教えてあげるよ。能天気を感じたのはキミが能天気だからさ」

この話を綴っている間中、雨のポツポツ音とパソコン本体のウンウン音とキーのカチャカチャ音が、私の睡魔の襲撃を辛うじて防御してくれていた。途中でお茶も飲まず、お土産に貰った浅草の雷おこしも食わずにいた。薬を飲むと何だか喉が渴く。

薬を飲んだのに、冷たいビールが飲みたくなる。どうしようかなあ～飲もうか飲むまいか。多分、飲んじゃって一気に睡魔に身を預けるのね。心まであげないけど……なんて。嗚呼、夜が明けると目覚まし係の小鳥がこう言ってくれていると良いな。

「お天道様がお出ましですよ～♪」

了